

# 養蚕ことばにおける方言分布と 高山社生徒・授業員の動き

## 絹文化！お国ことば調査プロジェクト（群馬県立女子大学）

菅野 穂波（4年・代表）・大上 舞（4年）・増山 侑来（3年）・佐藤 瑠香（2年）  
小菅 友捺（1年）・佐藤 未睦（1年）・松本 花（1年）

本研究は、〈桑の実〉を表す方言語彙の全国分布を取り上げ、その分布の形成過程を考察したものである。群馬県を中心に分布する「どどめ」類の語形が、飛び火的に分布する和歌山県と広島県、および、「どどめ」類以外の語形が分布する岩手県について、高山社授業員の派遣の状況や、養蚕業の歴史を調査した。その結果と、〈桑の実〉の方言分布を照合し、方言分布の形成過程を考察した。

### 0 はじめに

本研究では、養蚕ことばの中から、【図1】に示した〈桑の実〉の方言分布を取り上げ、その背景にある養蚕業の歴史や技術の伝播との関係を考察した。次の特徴をもつ地域に注目し、【図1】に示した〈桑の実〉の方言分布がいかんにして形成されたのかを探った。

高山社授業員の派遣は少ないものの、群馬県方言と同じ「どどめ」が分布する地域：和歌山県 広島県  
高山社授業員の派遣は多いものの、群馬県方言と同じ「どどめ」が分布しない地域：岩手県

令和3年度絹ラボ研究助成を受けて行った研究成果の全体は、「養蚕ことばにおける方言分布と高山社生徒・授業員の動き－〈桑の実〉の方言分布を解明するために－」（編著：絹文化！お国ことば調査プロジェクト 発行：群馬県立女子大学国文学科新井小枝子研究室・2022年1月31日）として冊子によって発表した。さらに、一般向けの情報発信として「方言の地図とおかいこさんのいた暮らし」（作成：絹文化！お国ことば調査プロジェクト）というリーフレットを作成して公開した。研究の詳細は、Webページ「絹文化！お国ことば調査プロジェクト」（<https://sites.google.com/mail.gpwu.ac.jp/kinubunkaokunikotoba>）にて公開している冊子及びリーフレットを参照されたい。

ここでは、紙幅の限定があることから、研究成果の概要を報告するのみとする。

### 1 本研究の前提

本章では、研究の前提となることがらを確認した。令和2年度の研究活動「養蚕ことばにおける方言分布の形成過程と養蚕業の展開」の概要と、高山社授業員の派遣の概要及び競進社の伝習所について述べた。

#### 1-1 令和2年度における研究成果の概要

令和2年度は、養蚕ことばの方言分布と人の動きについての関連性を明らかにするために、養蚕ことばの方言地図を収集・整理し、その方言分布の実態を養蚕業発展の歴史と照合し検討した。

特に、〈桑の実〉を表す語の方言分布について、新井小枝子（2011、2014）によって概略を把握した。新井小枝子（2011）は、東北大学方言研究センターの「消滅する方言語彙の緊急調査研究」をもとに地図化を行ったものである【図1】。平成13（2001）年に調査されたもので、話者は昭和7（1932）年生まれ以前の男性

である。同様に、新井小枝子（2014）は、群馬県立土屋文明記念文学館所蔵「伊藤信吉方言資料」を用いて地図化を行ったものである。昭和54（1979）年に、詩人伊藤信吉（群馬県前橋市出身）によって調査されたもので、話者の生年は不明であるが、調査当時の老年層から得られた語形だと推定される。

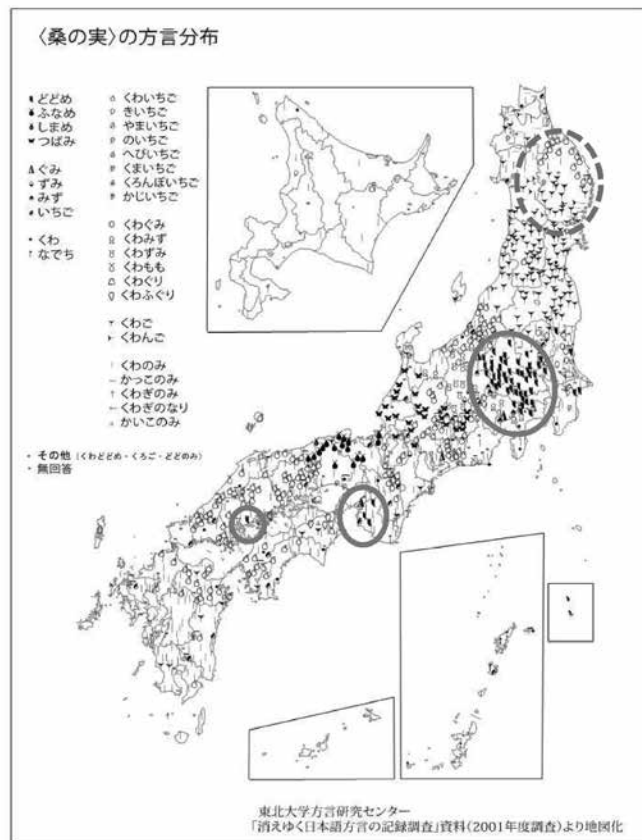
【図1】をみると、「どどめ」は群馬県を中心として関東圏に広く分布している。一方、方言圏論では解釈しにくい和歌山県や広島県にも飛び火的に分布している。和歌山県は、伊都郡かつらぎ町大字佐野、有田郡金谷町谷、日高郡中津村上田原の3地点、広島県は、賀茂郡黒瀬町津江の1地点にみられる。この分布地図の他に、『日本方言大辞典』（小学館）を引いてみると、和歌山伊都郡と広島県走島（福山市走島町）で用いられるとされている。「伊藤信吉方言資料」に基づいて作図された新井小枝子（2014）では、和歌山県西牟婁郡白浜町に分布していることもわかっている。これらを総合すると、和歌山県は5カ所、広島県は2カ所で分布が確認されている。

また、東北大学方言研究センターの資料（新井小枝子（2011））では、群馬県は26カ所に分布している。群馬県は古くから養蚕が盛んで、特に明治期には養蚕技術改良が盛んに行われた。この技術改良の動きの一つに高山社の取り組みが挙げられる。高山社は養蚕技術の研究のほか、全国各地から受け入れた生徒に養蚕技術を教え、ここで学んだ人を授業員として全国各地に派遣していた。高山社名簿を見ると、高山社から和歌山県に派遣された授業員数は22名（明治36（1903）年～大正6（1917）年）、和歌山県から高山社へ学びに出た生徒数は71名（明治23（1890）年～大正13（1924）年）であり、和歌山県と高山社とのつながりを確認できる。

さらに、養蚕技術伝達における桑の実の重要性について、町田菊次郎が著した文献『養蠶法』を用いて調査した。そこには、蚕の生命や生糸の品質維持における桑葉の重要性や桑の栽培方法が書かれていた。栽培方法に関しては實蒔法、接木法、壓條法、そして高山長五郎が考案した代出苗繁殖法の四つを紹介している。

實蒔法とは文字通り桑の実を蒔いて桑を栽培することであり、これにより得た苗木を接木の砧木とすることもあるという。このほか壓條法や代出苗繁殖法でも苗木は必要となるため、その苗木を育てる際に〈桑の実〉が使われた可能性が高い。【表1】<sup>注1</sup>は、和歌山県の桑栽培方法がわかる資料である。『和歌山県蚕業史一斑』の第3章栽桑の記述から作成したものである。これをみると、『養蠶法』で紹介された四つの栽培法と同じものが挙げられており、桑苗の生産業者が最多の大正7（1918）年には實蒔法と接木法による桑苗生産が圧倒的に多かったことがわかる。〈桑の実〉は桑栽培において重要であり、養蚕技術伝達の際に必ず話題になることがよくわかる。のちにみるように、高山社から和歌山県への授業員派遣は、明治43（1910）年～大正9（1920）年に集中的になされている。和歌山県において桑苗の栽培が安定的になされている様子と、派遣時期が重なっていることを確認した。

以上のことから、「どどめ」の飛び火的な分布の要因として考えうることを結論として述べた。和歌山県



【図1】新井小枝子（2011）「〈桑の実〉の語彙—造語法と方言分布—」『国文学言語と文芸』127号 おうふう

で「どどめ」が分布する地点と高山社との間にはつながりがあったこと、そこに関与した人びとが「どどめ」を使用していた可能性が充分にあったこと、〈桑の実〉は養蚕技術の伝達の際に話題に上がりうるものであったことを指摘した。これらをふまえて、和歌山県における「どどめ」は、高山社による技術伝達の中で群馬県から伝播したものである可能性が高いとした。

### 1-2 高山社授業員の派遣と競進社伝習所

この節では、世界遺産「高山社跡」でのフィールドワークで得た情報や、町田菊次郎（1904）『養蠶法』、藤岡市史編さん委員会編（1997）『藤岡市史 通史編 近世・近代・現代』、Webページ「藤岡市＞高山社に關係する人物」をもとにして、高山社や高山社の技術について概観した。

高山長五郎は、大正8（1919）年4月5日に、大日本蠶絲總裁大勲位功二級載仁親王から従五位を受けている。賞状には、以下のようにある（下線、太字は執筆者）。

夙ニ意ヲ蠶桑ノ改良ニ注キ蠶兒飼育ノ方法ヲ研究シ日夜精勵百難撓マス遂ニ一種ノ育蠶法ヲ創案シ名ケテ清温育ト稱ス其成績良好名聲遠近ニ喧シク來リテ教ヲ請フ者踵ヲ接スルニ至ル此ニ於テカ同志ト共に養蠶改良高山社ヲ創立シ推サレテ其社長トナリ拮据經營多數ノ生徒ヲ養成シ或ハ教師ヲ四方ニ派遣シテ改良飼育法ノ普及ヲ圖レリ而シテ此間蠶具ヲ新案シ或ハ栽桑ノ方法ヲ改良シ又ハ蠶種ヲ精撰シテ之ヲ頒布シ或ハ私財ヲ擲テ數次産繭品評會ヲ開キ又ハ率先製絲改良ヲ唱道シテ製絲改良高山社ヲ設立スル等其蠶絲業上ニ貢獻セル功績洵ニ偉大ナリ仍テ本會功績表彰規則に據リ特ニ茲ニ恩賜賞ヲ追贈シ以テ其功績ヲ表彰ス

この記述からは、高山長五郎が「清温育」という養蚕の方法のみならず蚕具の開発、栽桑の改良、繭品評会の開催、製糸改良にも力を入れて活動をしていたことがわかる。高山長五郎がどのように栽桑の改良を行ったのかは、高山社の二代目社長である町田菊次郎が明治37（1904）年に著した『養蠶法』第1章桑樹栽培に書き記されている。町田菊次郎（1904）『養蠶法』の38～39ページを参照されたい。ここでは、桑の栽培において栽培方法の研究とその土地にあった品種の選択、苗木の管理を重要視し、高山長五郎が新たに代出苗繁殖法を考案したことが述べられている。また、第4章蠶具には、高山長五郎氏がどのような蚕具の開発に関わっていたのかがわかる記述も認められた。高山長五郎は羽箒、給桑篩の開発に関わっていたことがわかった。

さて、高山社の概観に続いて、高山社授業員や生徒の人数について、本研究に関する情報も整理した。【図2】<sup>注2</sup>は高山社からののべ授業員派遣数、【図3】<sup>注3</sup>は高山社へののべ生徒数を、それぞれ都道府県ごとに地図上に示したものである。5000人以上、1000人以上5000人未満、500人以上1000人未満、100人以上500人未満、50人以上100人未満、50人未満の六つに分類し、色分けをした。左側の数字がその都道府県の人数の順位を、右側の数字が人数を表している。高山社のあった群馬県は、授業員派遣数、生徒数ともに1位で、人数が圧倒的に多

【表1】『和歌山県蚕業史一斑』に見られる桑苗の生産状況について

桑苗生産業者数及苗圃反別並に生産額

年次	生産者数	仕立て別苗圃面積					計	本苗本数	実生本数	計
		実生	接木	代出	取木	其ノ他				
		反	反	反	反	反				
大正4年	-	-	-	-	-	-	1,974,133	1,384,850	3,358,983	
大正5年	-	-	-	-	-	-	1,551,140	708,600	2,259,740	
大正6年	-	-	-	-	-	-	2,781,161	2,317,500	5,098,661	
大正7年	1,123	76,405	718,203	2,725	-	-	797,403	5,077,040	2,564,780	8,641,820
大正8年	443	13,818	308,814	1,000	-	-	323,702	7,633,570	3,668,770	11,302,340
大正9年	228	9,221	168,113	900	5	-	178,309	2,255,214	1,457,538	3,712,752
大正10年	256	12,111	150,117	300	-	-	162,520	3,343,888	820,460	4,164,348
大正11年	148	22,923	110,618	-	-	-	133,611	1,719,710	1,698,200	3,417,910
大正12年	193	31,603	111,725	1,610	300	-	145,308	2,214,098	2,882,000	5,096,098
大正13年	297	38,018	246,223	600	-	-	284,911	4,119,568	3,341,000	7,460,568

↑ 数値はママ

出典：和歌山県蚕業取締所（1925：大正14）『和歌山県蚕業史一斑』（国立国会図書館デジタルコレクション）

い。

【図2】によって授業員派遣数に注目すると、群馬県とその周辺が、人数の多い地域であるといえる。岩手県は群馬県と離れているにもかかわらず、派遣数が1863人で2位と、きわめて多い。高山社、すなわち、群馬県からの養蚕技術が伝播している可能性は高い。しかし、【図1】をみると、岩手県には、群馬県を中心に用いられている〈桑の実〉を意味する「どどめ」はみられない。反対に、群馬県から離れていて、かつ、授業員派遣数がそれぞれ、24人で29位、22人で30位とそれほど多くない広島県と和歌山県に「どどめ」が分布している。授業員派遣数の多少と、「どどめ」の分布の有無との関係は、どのように説明したら良いのかという課題がみえてくる。

岩手県、和歌山県、広島県への授業員派遣数を、年次別にまとめたものが【表2】<sup>注4</sup>である。表中において年次がとんでいる部分は、当該年次に授業員の派遣がなかったことを意味している。岩手県には、明治27（1894）年からの派遣があり、以後大正期まで継続的に派遣されている。広島県には、明治22（1889）年から明治32（1899）年まで連続して派遣され、派遣時期が明治期に集中している。一方、和歌山県には明治36（1903）年の派遣ののち数年において、明治43（1910）年～大正9（1920）年に集中的に派遣されている。「どどめ」が分布するこの3県の派遣状況を見ると、お互いに違いがありそれぞれの地域の養蚕業の位置づけに違いがあることが想像される。

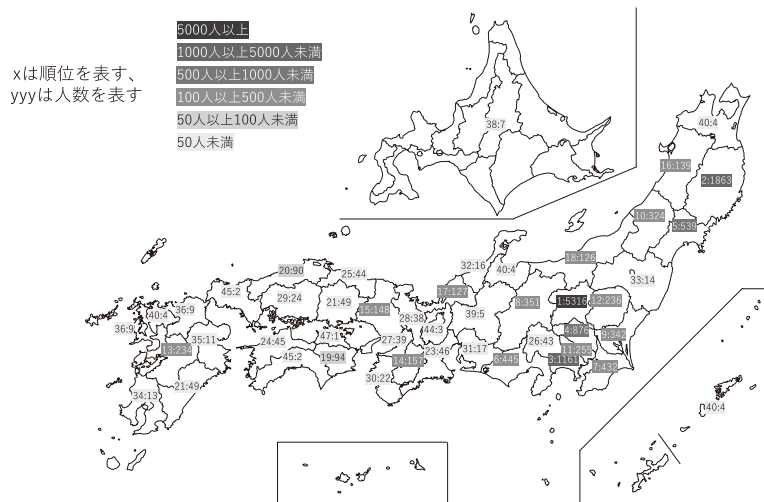
さらに、【図3】によって生徒数に着目すると、派遣数で2位だった岩手県は331人で8位であり、多いが派遣数ほど突出してはいない。広島県は108人で22位、和歌山県は71人で31位である。やはり岩手県よりもかなり少ないことがわかる。

ところで、高山長五郎の弟である木村九蔵もまた、養蚕業の発展に貢献した人物として知られている。ここでは、競進社でのフィールドワークで得た情報や、小暮秀夫（1987）、Webページ「本庄市>競進社模範蚕室」をもとにして木村九蔵のおこした競進社について概観した。

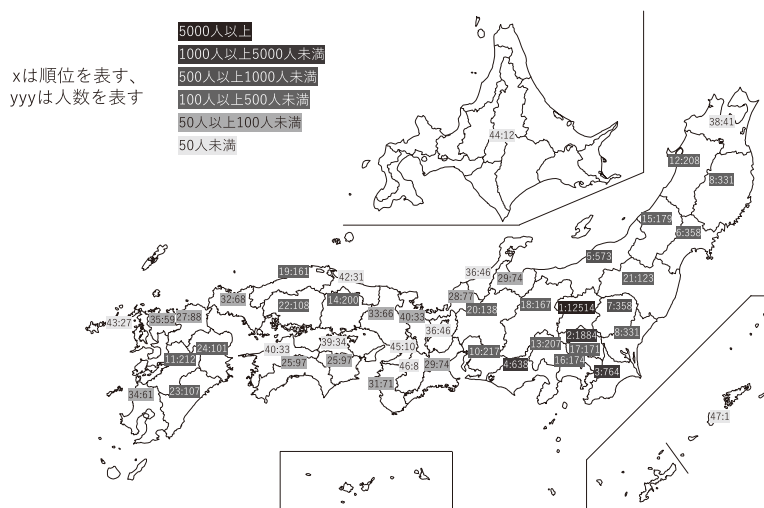
木村九蔵は、弘化2（1845）年に緑野郡高山村（現在の藤岡市高山）で生まれた。幼いころから養蚕に興味を持ち、実際に飼育して多くの失敗を経て、明治5（1872）年新しい飼育法である「一派温暖育」を考案し、その普及に努めた。明治10（1877）年には養蚕改良競進組を結成し、全国に教授員を派遣して養蚕法を広めた。そして、明治15（1882）年にはその養蚕法を広めるため、未熟な養蚕家に丁寧に指導し、ついには門下熟練の生徒を巡回教授として派遣するに至り、明治17（1884）年には養蚕改良競進社、養蚕伝習所を設置し、さらに組織を拡大して競進組に改組した。明治27（1894）年にはついに、九蔵考案の養蚕に適した構造がふんだんに取り入れられた蚕室を見玉伝習所内に設置し、それは人びとに「模範蚕室」と呼ばれるようにもなった。明治後期から大正・昭和前期を通して多くの生徒がこ

【表2】年次別にみた授業員派遣数

元号	西暦	岩手県 2位	和歌山県 29位	広島県 30位
明治22年	1889			1
明治24年	1891			3
明治27年	1894	1		2
明治28年	1895	2		2
明治29年	1896	2		3
明治30年	1897	1		2
明治31年	1898	8		1
明治32年	1899	11		1
明治33年	1900	19		
明治34年	1901	40		
明治35年	1902	67		3
明治36年	1903	93	1	3
明治37年	1904	132		2
明治38年	1905	168		
明治39年	1906	181		
明治40年	1907	238		
明治41年	1908	247		
明治42年	1909	157		
明治43年	1910	115	1	
明治44年	1911	86	6	
明治45(元)年	1912	62	3	
大正2年	1913	35	3	
大正3年	1914	48	1	
大正4年	1915	26		
大正5年	1916	42	2	
大正6年	1917	20	1	
大正7年	1918	7		1
大正8年	1919	9	1	
大正9年	1920	7	3	
大正11年	1922	4		
大正12年	1923	21		
大正13年	1924	10		
大正14年	1925	4		
のべ人数・回数		1863	22	24



【図2】のべ授業員派遣数



【図3】のべ生徒数

の模範蚕室で養蚕を学んだとされている。

また、「競進社模範蚕室/本庄市競進社解説シート No. 2 競進社の分教場と支部伝習」をみると、和歌山県に伝習所が設けられていることが確認できる。この解説シートに記されている内容について、典拠となる一次資料に当たり、具体的な検証を行う必要はあるものの、競進社もまた様々な地域に伝習所を設け、教授員を各地に派遣していたことがわかる。一次資料に当たり、さらなる検証を継続していきたいと考える。

## 2 研究の目的

令和3年度の研究では、令和2年度に残した課題を受けて、養蚕ことばにおける方言分布の実態と高山社の生徒・授業員の動きや技術指導のありようを照合し、方言分布の形成過程を明らかにすることを目的とした。特に、〈桑の実〉を表す方言分布を中心に考察を行うこととした。

まず、「どどめ」が飛び火的に分布する和歌山県と広島県に注目した。次に、高山社からの授業員派遣数

が全国2位であるにもかかわらず、「どどめ」の分布が確認されていない岩手県に注目した。

### 3 「どどめ」が飛び火的に分布する地域—和歌山県・広島県

「どどめ」が飛び火的に分布している地域の養蚕業の歴史と、「どどめ」を含む〈桑の実〉を表す語以外の養蚕ことばも含めた養蚕語彙体系の実態について述べた。養蚕業の歴史については県史をはじめとする歴史資料を用いた。また、養蚕ことばの調査には方言辞典を用いた。

#### 3-1 和歌山県

和歌山県の高山社授業員派遣数はのべ22人であり、和歌山県には、1-1で確認した通り、5地点で「どどめ」の使用が確認されている。令和2年度の研究により、和歌山県で「どどめ」が分布している地域と高山社の授業員の派遣地点が一致したことから、群馬県と和歌山県には養蚕技術の伝達を媒介したつながりがあることが確認できた。群馬県と和歌山県のつながりをさらに検証するため、「どどめ」以外の養蚕ことばが一致するのか調査した。また、養蚕ことばが定着した背景を探るため、和歌山県の養蚕業の歴史について調査した。

まず、方言辞典類を用いて和歌山県の養蚕ことばを調査した。『和歌山縣方言其1』『和歌山縣方言其2』『紀伊里域植物方言集』『和歌山県那賀郡安楽川村方言訛言集』『紀州の方言』（松本正信・1936年）『紀州の方言』（神坂次郎・1970年）『近代日本方言資料集[郡誌編]第6巻/近畿』『紀州日高方言集』から、〈蚕〉の方言を1語、〈桑〉の方言を3語、〈毛桑〉の方言を1語、〈繭〉の方言を1語確認できた。〈絹の着物〉や〈絹の釣り糸〉などを表す方言も確認できたが、これらは生糸の加工品であり本研究で扱う養蚕ことばの隣接語彙にあたる。そのため、今回は言及しなかった。

〈蚕〉を表す方言では「かいこさん」が確認できた。これは「かいこ」に尊敬の接尾辞「さん」が付いたものである。群馬県においても「かいこさま」「おこさま」のように、尊敬の接尾辞「さん」「さま」を付けた語形が見られ、〈蚕〉に敬称を用いるという点で群馬県と一致している。しかし、こうした敬称を付した〈蚕〉の方言は、養蚕が生活を支える産業となった地域で広く使用される傾向がある。和歌山県も養蚕業の恩恵を受けたため、蚕を大切にするという意味で蚕に敬称を付した可能性があり、群馬県からの影響とは言い切れない。

〈桑〉や〈毛桑〉を表す方言としては、「くわ」「くわのき」「のぐわ」「どろみ」が確認できた。これらの方言は『紀伊里域植物方言集』で記述されていたものであり、このうち〈毛桑〉とは桑の一種を指している。〈桑〉を表す「どろみ」は群馬県の〈桑の実〉を表す方言「どどめ」と類似しており、音韻変化したものだと考えられる。群馬県の「どどめ」が、和歌山県方言において〔ド〕が〔ロ〕に、〔メ〕が〔ミ〕に変化することで「どろみ」になったということである。その根拠についても、以下の2点を示した。

『日本方言大辞典』では、〔ド〕という音が〔ロ〕に変化する傾向をもつ地域として、和歌山県東牟婁郡古座川町を挙げている。「どろみ」を使用する伊都郡とは離れた地域だが、和歌山県方言において〔ド〕が〔ロ〕に変化する可能性が考えられる。これに関しては、飯豊毅一（1982）からも確認できた。和歌山県方言の子音にみられる特徴として、ダ行音がラ行音に変化する傾向があるとの記述があった。また、母音の〔イ〕と〔エ〕は発音が近く、これらの音の混同は日本の方言において広くみられる。飯豊毅一（1982）から、和歌山県方言がもつ母音の特徴として〔イ〕と〔エ〕の交替が確認できた。

これらをふまえ、和歌山県の「どろみ」は群馬県の「どどめ」の音韻が変化したものだと考えた。この「どろみ」に関しては、『紀伊里域植物方言集』で伊都地方の方言とされていた。令和2年度の研究で、高山社から和歌山県へ派遣された授業員のべ22名のうち2名が伊都郡へ派遣されており、和歌山県から高山社へ学びに出た生徒71名のうち6名が伊都郡の出身であることがわかっている。伊都郡と高山社の間に人の動きがあったことをふまえ、伊都郡における「どろみ（どどめ）」の分布は、高山社を介して伝播した可能性がある。

〈繭〉を表す方言としては「まい」が確認できた。これは「まゆ」の音韻変化と考えられる。『日本方言大

辞典』では、[ウ]の音が[イ]に変化する傾向をもつ地域として、和歌山県東牟婁郡古座川町を挙げていた。

以上、和歌山県がもつ養蚕ことばとしては計6語が確認でき、このうち「どろみ」は群馬県方言の影響を受けたものと考えられる。〈桑〉以外の方言において群馬県の影響は見られなかった。養蚕ことばの方言について確認できた語形は少なく、群馬県のような豊かな養蚕語彙の体系は確認できなかった。

次に、和歌山県の養蚕業の歴史を把握するため、『和歌山県史』を用いて和歌山県の養蚕業の概要を整理した。和歌山県の養蚕に関する記述は少なく、産業においてそれほど大きな比重がないものであったと推測できる。和歌山県の養蚕は、古代から近世に至るまで細々と行われてきたが、本格的に産業として行われるようになったのは明治以降だとわかる。輸出商品として生糸が注目された幕末開港の頃から奨励策が行われた。明治10年代には先進地域からの養蚕・製糸技術の導入が盛んに行われるが定着せず、収繭量が一万石を超えたのは明治30年代に入ってからであった。和歌山県は群馬県などと比べて養蚕の後進地域であったといえる。高山社からの授業員の派遣は明治36(1903)年から大正9(1920)年にかけて行われたことから【表2】、養蚕が定着したあとでさらなる振興を図るために、授業員の派遣を求めようになったことがわかる。また、富岡製糸場に伝習生を派遣しており、群馬県から養蚕を学んでいたことがわかる。養蚕の文化が浅かった地域には、養蚕で使う桑や蚕などを表す語が使われる機会が少なく、人びとになじみがなかった。そのため、外部の養蚕指導者たちが使う「どどめ」のような語が受け入れられ、現地のことばに置き換えられずそのまま和歌山県に定着したのだと考えられる。

『和歌山県史』で養蚕伝習所が開設されたという記録があり、1-2で述べた資料「競進社模範蚕室/本庄市 競進社解説シート No. 2 競進社の分教場と支部伝習所」にも和歌山県に伝習所を設けたという記録を確認した。この伝習所が一致する可能性がある。競進社の支部が和歌山県の「どどめ」の分布がある地域に作られたことが証明できれば、「どどめ」の伝播の過程がより鮮明になると考えられる。

### 3-2 広島県

広島県の高山社授業員派遣数はのべ24人であり、1-1で確認した通り、広島県には2地点で「どどめ」が確認されている。和歌山県同様、「どどめ」が定着した背景を探るため、広島県の養蚕業の歴史について調査した。

広島県も和歌山県と同様に、古くから養蚕業を行っていたが、自家用の域を出ず、細々としたものだった。しかし、江戸時代から養蚕・絹産業の振興を試みている。国産地絹で領内需要のすべてをまかない、他国絹を領内から追放する国産自給策を構想し、様々な奨励策を数回にわたって行っていたが、そのいずれも実を結ばなかった。幕末開港後に再び奨励策が行われ、先進地域から学んだ養蚕業が展開された。広島県から種紙や桑苗の購入を行うほか、蚕の飼養法を学んでいたという記録がある。

また、明治26(1893)年の「公文雑纂」に百々三郎という養蚕指導者の存在が記録されている。当時の広島県の養蚕業の技術は未熟で、桑の栽培などもうまくいっていなかった。これを憂慮した百々三郎は全国各地を巡って養蚕を学び、広島県内の養蚕の改善を模索した。

広島県は、養蚕の奨励自体は1700年代半ばから行われていたが、産業として隆盛するのは和歌山県同様明治に入ってからだった。高山社からの授業員の派遣は明治22(1889)年から明治37(1904)年の期間を中心に行われており【表2】、授業員派遣時期は和歌山県よりも早い。しかしその後、授業員の派遣はほとんどなくなり、継続的に派遣が行われている岩手県と比較して養蚕が定着しなかったことがわかる。つまり、広島県も養蚕の後進地域であるといえる。養蚕の歴史が浅いことは、「どどめ」が定着する要因となる。群馬県との養蚕を通じた交流は県史の記述では確認できていないが、広島県から学んだ技術のなかに「清温育」があることや、百々三郎が日本各地を巡って養蚕を学んでおり、群馬県に立ち寄った記録もあることから、群馬県の「どどめ」が広島県に伝わる可能性はある。また、県史には記録がないが、高山社の授業員派遣も「どどめ」が伝わる要因の一つとなったと考えられる。

## 4 「どどめ」以外の語が分布する地域—岩手県

岩手県の高山社授業員派遣数はのべ1863人であり、群馬に次いで多くの授業員が派遣されている。これまで、群馬県を中心として関東地方にみられる「どどめ」が飛び火的に分布する要因として、高山社授業員との関わりがあるのではないかという仮説のもと検証を行ってきた。しかし、授業員派遣数が他県をはるかに上回る岩手県に「どどめ」は分布していない。その背景には、和歌山県及び広島県とはまた異なった養蚕の歴史があるのではないかと考え、調査を行った。

まず、岩手県の方言辞典を確認した。岩手県の養蚕ことばは117語（異なり語数）確認できた。〈蚕〉〈桑〉を表す語形のほか、養蚕ことばの隣接語彙として〈真綿〉〈糸〉を表す語形を確認した。方言辞典類には、〈廃物〉や〈習俗〉の語彙も採録されており、養蚕ことばがある程度のまとまりをもって、語彙の体系として存在しているということがわかった。加えて、岩手県では養蚕ことばの方言形が多いことも確認できた。

次に、岩手県の養蚕業の歴史を把握するため、『岩手県史』第1巻～第11巻、および『岩手県蚕糸業史』を確認した。今回は、各郡の蚕糸業の歴史や真綿生産の背景が記述されている『岩手県蚕糸業史』を用いて、岩手県の養蚕の概要を整理した。

正保2（1645）年6月、南部藩家老石である井伊賀守に布告させた「禁無断移出品目」のなかに真綿の記述があり、当時すでに各地で蚕が飼われ、真綿が生産されていたことが確認できた。

武家政治時代の農民の最優先事項は年貢を上納することだったが、寒冷地である岩手県では自らの食糧や衣料を充足させるだけでも容易なことではなかった。上納を割り当てられると、農民たちは真綿を上納用とし、自らの衣料には大麻や山野自生の雑繊維を利用していた。養蚕が奨励されるようになると、養蚕先進地からの養蚕教師の招聘、先進地への人材の派遣等が行われた。養蚕を学んだ地域としては福島、仙台、群馬などが挙げられる。明治9年には福島県から養蚕教師を雇い、熊谷県の飼育方法と福島県の飼育方法との比較試験を実施した。結果、岩手の飼育法に適していたため、熊谷県の飼育方法によって伝習を行うことにしたなどの記録があり、飼育法を先進地に学ぶことで、質の向上や効率化などを図ったことがわかる。東磐井郡大原村では、明治35（1902）年に高山社、競進社等から養蚕教師を招聘している。育蚕の改良には高山社との密接な関係があったとした。

しかし、〈桑〉に関しては、群馬県よりも先に福島県から学んでおり、岩手県では群馬県から〈桑〉に関する技術を学ぶよりも先に〈桑〉に関する語彙体系が展開していたと考えられる。

以上のことから、岩手県では真綿が養蚕奨励以前より上納品として多く生産されており、古くから養蚕は人びとの生活にとってなくてはならない生業だったといえる。また、前述したように、岩手県では〈蚕〉を表す語形に敬意を表す接辞を付したのや「とどこさま」などの蚕の貴重性を表現した語形がみられる。特徴的な名づけをしているということは、養蚕が古くから重要な産業として位置付けられていた可能性が高い。このことから、岩手県に「どどめ」が分布しないのは、岩手県においては養蚕が生業として人々の間に浸透しており、岩手県には元々養蚕ことばの体系ができあがっていたためだと考えられる。そのため、群馬県から養蚕技術は学んでいるが、群馬県の養蚕ことばは定着しなかったのではないかと考えられる。

## 5 まとめ

本研究では、「どどめ」が飛び火的に分布する和歌山県・広島県と、高山社からの授業員派遣数が多いにもかかわらず「どどめ」が分布しない岩手県に注目し、養蚕ことばにおける方言分布の形成過程を考察した。

まず、和歌山県と群馬県とのつながりの度合いを探るため、方言辞典類から和歌山県の養蚕ことばを収集し、群馬県方言との一致・不一致を整理した。その結果、〈蚕〉を表す方言では〈蚕〉に対して敬称を用いており、この点で群馬県方言と一致した。しかし、敬称を付した〈蚕〉の方言は、養蚕業が生活の基盤と



なっていた地域において広く使用される傾向があるため、群馬県の影響とは言い切れなかった。また、〈桑〉の方言では「どろみ」という語形が確認できた。群馬県の「どどめ」と類似しており、和歌山県方言がもつ音韻の特徴から、「どろみ」は「どどめ」の音韻が変化したものであるとした。「どろみ」が分布する伊都地方には高山社との間で人の動きがあったため、高山社を介して伝播した可能性が高いといえる。このほか、〈繭〉を表す語もあるが群馬県との一致はみられず、全体として豊かな養蚕語彙体系は持っていない。

これらの方言分布形成の背景を、養蚕業の歴史から確認した。県史によれば、和歌山県は古くから養蚕を行っていたものの、産業として定着し始めるのは明治以降であったという。養蚕の後進地域であることが、技術伝達の際に外部の「どどめ」ということばがそのまま定着した要因になったのではないかと結論付けた。

次に、広島県に「どどめ」が分布する要因を探るため、県史をはじめとした歴史資料から養蚕業の歴史を調査した。広島県は古くから養蚕業を行っていたものの、産業として定着するのは明治以降であった。高山社を除き、群馬県との明確なつながりは確認できないが、福島県を介して「清温育」を取り入れたこと、明治期における広島県内の養蚕指導者が養蚕を学ぶために群馬県を訪れていたことがわかった。これらの動きを通し、養蚕の後進地域である広島県に「どどめ」が流入しやすい可能性はあると結論付けた。

最後に、岩手県に「どどめ」が分布しない要因を探るため、群馬県との養蚕ことばの一致の度合い及び養蚕業の歴史について調査した。方言辞典類から養蚕ことばを収集した結果、〈蚕〉に敬称を付すという点で群馬県と一致していた。このほか、〈桑〉〈真綿〉〈糸〉などを表す語も確認できたが、群馬県との一致はみられなかった。しかし、群馬県と同様に豊かな養蚕語彙体系が存在し、養蚕が人びとの生活に根付いていたことがわかる。

これらの語彙体系の背景を、養蚕業の歴史から確認した。県史をはじめとした歴史資料によれば、岩手県では上納品として真綿の生産を古くから行っており、養蚕は重要な生業であった。〈蚕〉に敬称を付した特徴的な名づけを行っている点からも、岩手県に養蚕が強く定着していたことが推測できる。また、養蚕の奨励においては高山社からも養蚕技術を学んだが、〈桑〉の栽培に関しては福島県から先に学んでいた。そのため、高山社から技術を学ぶより以前から〈桑〉に関する語彙体系ができていたことが推測される。以上、岩手県では古くから養蚕が生業として定着していたこと、既に養蚕ことばの体系ができていたことから、群馬県の養蚕ことばの影響を受けなかったと結論付けた。

## 【謝辞】

本研究を行うにあたり、多くのご協力をたまわった。データベースや一次史料の閲覧に際しては、藤岡歴史館の軽部達也氏と群馬県立歴史博物館の佐藤有氏に、解説及びご指導をいただいた。また、高山社の見学に際しては、高山社解説員の方々に解説をいただいた。このほか、県史や方言辞書に関わる資料探査や資料貸借にあたっては、群馬県立女子大学附属図書館の司書に相談にのっていただいた。この研究活動に関わるすべての学恩に、感謝申し上げます。

## 注

- 1 【表1】は、和歌山県蚕業取締所編（1925）『和歌山県蚕糸業一斑』にある表を編成し直して作成した。
- 2 データベース『高山社名簿全部（授業員派遣地・生徒名簿・分教場）20121004\_Excel』を藤岡歴史館において閲覧して作成した。群馬県立歴史博物館所蔵「高山社・蚕業学校関係資料」のうち、明治21年度～大正14年度の、高山社授業員派遣地や生徒名簿や分教場を記した一覧表および名簿を基にして作成されたデータベースである。
- 3 注2に同じ。
- 4 注2に同じ。

## 引用文献

- 新井小枝子「〈桑の実〉を表す語彙—造語法と方言分布—」『国文学 言語と文芸』第127号（おうふう社・2011）
- 新井小枝子「伊藤信吉方言資料にみる〈桑の実〉の方言分布—多様な方言資料を横断的に利用した方言研究のために—」  
『群馬県立女子大学国文学研究』第三十四号（群馬県立女子大学国語国文学会・2014）
- 飯豊毅一ほか『講座方言学7—近畿地方の方言—』（国書刊行会・1982）
- 岩手県蚕糸振興協議会『岩手県蚕糸業史』（岩手県蚕糸振興協議会・1980）
- 上山景一『紀州日高方言集』（1931）
- 梅本信也『紀伊里域植物方言集』（2002）
- 大西拓一郎編『新日本言語地図』（朝倉書店・2016）
- 金野菊三郎編『気仙方言辞典』（大船渡市芸術文化協会・1978）
- 神坂次郎『紀州の方言』（有馬書店・1970）
- 木村晟ほか編『近代日本方言資料集[郡誌編]第6巻/近畿』（有限会社港の人・2005）
- 小暮秀夫編『武蔵国児玉郡誌』（臨川書店・1987）
- 小松代融一『岩手方言集』（国書刊行会・1975）
- 斎藤孝滋『岩手県のことば』（明治書院・2001）
- 尚学図書『日本方言大辞典』（小学館・1989）
- 寺井義弘『青森県南 岩手県北 八戸地方方言辞典：古典出典付』（1986）
- 広島県『広島県史近代現代資料編Ⅱ』（広島県・1975）
- 広島県『広島県史 近世2 通史Ⅳ』（広島県・1984）
- 広島市郷土資料館『広島県の養蚕業の歴史と技術』（広島市教育委員会・1992）
- 藤岡市史編さん委員会編『藤岡市 通史編 近世・近代・現代』（藤岡市・1997）
- 本堂寛・竹内晃子編『共通語引き 山田ことば辞典：岩手県下閉伊郡山田町（データ版（CD-R）の抜粋印刷冊子）』（岩手県大学教育学部日本語学研究室・2018）
- 松本正信『紀州の方言』（1936）
- 八重樫眞編『岩手縣釜石町方言誌』（日本民族研究會・1932）
- 藪重孝編『和歌山県那賀郡安楽川村方言訛言集』（1931）
- 和歌山県史編さん委員会『和歌山県史 近現代一』（和歌山県・1989）

## 引用 web ページ

- 「競進社模範蚕室/本庄市 競進社解説シート No. 2 競進社の分教場と支部伝習所」  
<https://www.city.honjo.lg.jp/material/files/group/28/2.pdf>
- 国立国会図書館デジタルコレクション 『養蠶法』  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/841534>
- 国立国会図書館デジタルコレクション 『和歌山県蚕糸業一斑』  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/978513>
- 国立国会図書館デジタルコレクション 『和歌山縣方言其1』  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1229321>
- 国立国会図書館デジタルコレクション 『和歌山縣方言其2』  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1172145>
- 藤岡市「高山社に關係する人物」  
<https://www.city.fujioka.gunma.jp/soshiki/kyoikuiinkai/bunkazaihogo/2/2/1071.html>
- 本庄市「競進社模範蚕室」  
[https://www.city.honjo.lg.jp/bunka\\_supotsu\\_kanko/kokyoshisetsu/shinaishisetsu/10960.html](https://www.city.honjo.lg.jp/bunka_supotsu_kanko/kokyoshisetsu/shinaishisetsu/10960.html)